

城南神社

〔小枝のひがし森の中にあり。当社久代神功皇后三韓退治として御出陣の時、勝利御祈の為勸請し給ふ。〕

社号を真幡寸社と称す。延喜式出。祭神は国常立尊にして、日本不易皇太神宮となづく。其後桓武天皇平安城開闢の時、

鎮護の為伊勢、石清水、加茂、松尾、平野、稲荷、春日の七社併せて、王城の南方なれば城南神となづけ、即ち桓武帝

宸筆の神名を当社の神体とす。例祭は九月廿日、神与二基。上鳥羽、下鳥羽、竹田、塔森、小枝等の生士神とす〕

八幡宮 〔東の方にあり〕

若宮 〔本社 of 東側にあり〕

三光社 〔本社 of 南上壇の地にあり〕

常念寺

〔城南神の巽の方中島村にあり。本尊は阿弥陀仏の立像にして春日の作なり。いにしへは秋の山に阿弥陀堂

あり、則ち此本尊を安置せり。故に秋の山の旧跡は此寺の有となる。秋の山前編に見へたり〕

御所内

〔城南神の南、中島のひがし三町ばかりの地の字なり。是則ち白河院、鳥羽院の両帝仙居し給ふ城南離宮

南殿の旧跡なりとぞ。北殿は今の安楽寿院の地なり。又中島村民居一町ばかり良の方に一壇高き地あり、字を高畠とい

ふ、いにしへ仮山の地なり。又此所のひがしに御池といふ字の所あり、いにしへの池にして、今水涸て田畑となる。土

人曰、七八十年前土中より船の形の朽木を掘出せしといふ。其外龍頭、前山、平門院馬場、菖蒲池、泉水等の字あり、是みな離宮の旧跡なり。余は前編に見へたり」

鳥羽殿におはしまし氣る頃、常見^レ花といへる

心をつかうまつりけるつゝるでに読せ給ひける

千 載

咲しより散まで見れば木のもとに花も日数も積りぬる哉

白 河 院

わづらはせ給ひける時、鳥羽殿にて時鳥の鳴けるを

聞せ給ふて読せ給しける

千 載

常よりもむつまじきかな郭公しでの山路の友と思へば

鳥 羽 院

鳥羽の南殿の東西の坪に所なき程に菊植させ給けり、公重少将人に

すゝめて菊もてなさせけるにくはゝるべきよしありければ、

山 家 集

君が住やどの坪には菊ぞかざる柚の宮とやいふべかるらん

西 行

建永元年八月十五夜鳥羽殿に御幸ありて、御舟にて御遊などありけ

る、月の夜和歌所のをのことも参れりけるよし聞召て、いたさせ給

びける

千載 いにしへも心のまゝに見し月の跡を尋る秋の池水

後 鳥羽院

〔鳥羽殿の門は南北にありて、御所は西面にして、羅城門より山崎に至る往還道なり。其西に舟着あり、是より神崎大物浦もつのうらにいたる。此下流は鴨川桂川の末なり。又此ほとりに洲浜す はまどの殿とて新大納言成親しんだいな こんなりちかの別荘あり、此人俊寛僧都など、叛逆の企ある由あらはれて左遷の時こゝより舟に乗給ふ〕

平家物語曰 鳥羽殿を過給ふにも、此御所へ御幸成しには一度も御供にははづれざりし物をとて、我山莊洲浜す はま殿とてありしをも余所に見てこそ通られけれ。鳥羽の南の門出て舟遅しとぞ急がせける。

成菩提院しやうほ だいめん

〔中島村なかじまの北、竹田不動院ふ どうめんの西一町ばかりに旧跡あり、今字となる。土人上品大王じやうほんだいわうといふ、例の片言なり、

保元元年六月十三日美福門院び ふくもんあん此所において飾をおろし給へり〕

保元物語曰 六月十三日美福門院び ふくもん、鳥羽の成菩提院しやうほだいの御所にて御かざりおろさせ給ひ、現世後生をたのみまいらせ給

ふ〕

山槐記曰 安元元年九月朔日院鳥羽に御幸ありて、明日より成菩提院しやうほだいめんの念仏を始行はるべきなり〕